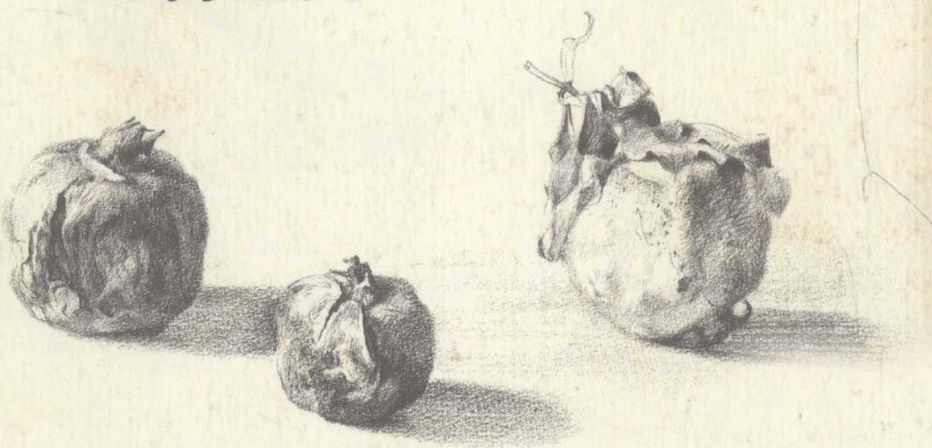


晴 耕 雨 読

ときどき

ワ イン

玉村豊男



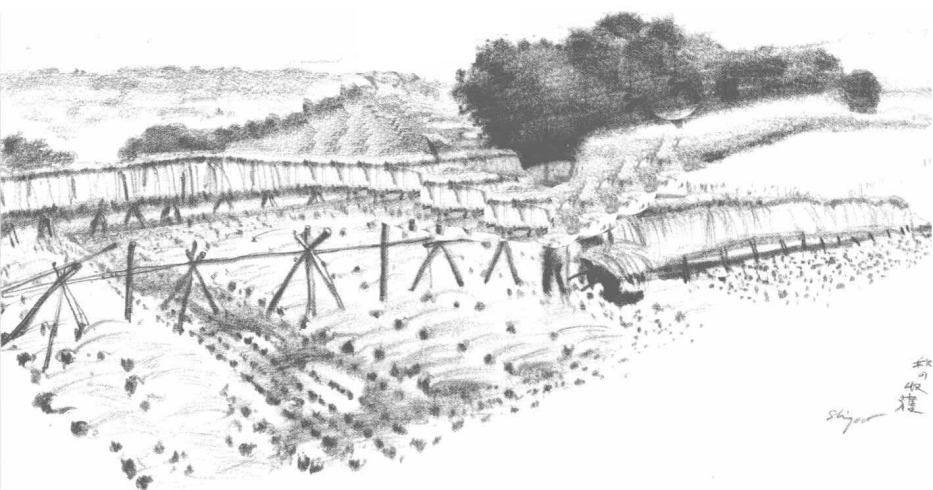
講談社

晴 耕 雨 読

ときどき

ワ イ ン

玉村豊男



秋の
収穫
Shigen

講談社

<著者紹介>

玉村豊男 (たまむら・とよお)

エッセイスト。1945年、東京に生まれる。1968年、パリ大学言語学研究所留学。1971年、東京大学フランス文学科卒業。通訳、ツアー・コンダクター、翻訳業などを経て、文筆生活に入る。1983年より長野県軽井沢町に移住、現在は小県郡東部町に在住。

主な著書に『パリ旅の雑学ノート』『ロンドン旅の雑学ノート』『料理の四面体』『食の地平線』『アルマジロ私想録』『新型田舎生活者の発想』『グルメの食法』『パリ物語』などがある。

晴耕雨読ときどきワイン

一九九三年六月十八日 第一刷発行

著者——玉村豊男

© Toyoo Tamamura
Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二 郵便番号一―二二―〇一

電話 編集部〇三―五九六―五三三

販売部〇三―五九六―六三三

製作部〇三―五九六―六二五

印刷所——株式会社精興社

製本所——株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります。

乱丁本・落丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは学芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-206311-5 (学2)

晴耕雨読ときどきワイン 目次

第一章 軽井沢に暮らす

今年の冬は建築ブーム 10

ホントの季節は何月号？ 13

馬に乗って鹿を追う生活？ 16

夏が来るのがこわい 20

思いがけない町長選挙 24

早目に摘んでやること!! 27

少しでも日光浴 30

軽井沢AV事情 34

'88秋、パリの街から 37

第二章 おいしい生活

田舎の電化生活 44

国際的アジア人 47

南大門 50

新春いろいろ 54

シバとコロの話 57

鹿の肉はウマイ 60

わずか四日のパリ旅行 64

禁煙ハウス 67

金は天下のまわりもの 70

日本全国ユネスコ村 74

第三章 きょうの風向き

エダマメの晩夏 80

微笑みと唐辛子の国 83

帯が短し…… 86

東京の別荘 89

恵比寿グルメガイド 92

異境への、旅の気分 96

雪景色を見て考える 99

花粉症 103

ぬえの鳴く夜 106

イギリス旅行で考えたこと 109

引越し仮り住まい 113

モスクワ空港の日本食堂 116

第四章 仮り住まいの日々

田園の散歩 122

本日のメニュー 125

フランスで知る日本人のイメージ 129

グリーン車と禁煙席 132

信州信濃のおらが蕎麦 136

ラスト・デケイド 139

ヨーロッパは「戦時下」だった 142

雪かきと戦争の季節 145

第五章 新居完成

イタリアからの便り 149

霜鳥さんお元気ですか 152

五月末の信州雑感 156

サッポロからナガノへ 159

相撲ファン 163

最後の引越し 170

新幹線ホテル 173

くるみ町 176

タイで塩を買う 180

寒中見舞 183

幸福な飛行 186

春が来た 189

ワインセラ― 192

日本一の雷電鍋 195

第六章 マイ・ライフ・アズ・ア・ファーマー

もの思う新緑の季節 202

夜は老人 205

温泉を考える 209

山の中のマクロ 212

日常への旅 216

雷電ちゃんこ鍋の顛末 219

冬じたく 223

モミ殻を焼く 226

年男の正月 229

あとがき 234

晴耕雨読ときどきワイン

装帧／安彦勝博
装画／船山滋生
(表紙・本文)

第一章 軽井沢に暮らす



今年の冬は建築ブーム

軽井沢に住みついて五年になるが、今年の冬がいちばん暖かだった。

最初の年は雪の多い厳冬で、連日家の前の小径を三百メートルもひとり雪かきしなければならず、こりやあ大変なところに引越してきたもんだわいと思ったものだが、この冬は雪がどこにも見当たらない。もっとも四月になってドカ雪が降ることもあるから油断はならないが、どうやらこのまま春に移行しそうだ。

このところの軽井沢は、異常な建築ブームである。

どんどん、別荘が建っている。

五年前は私の家のまわりにはなんにもなくて、

「雑木林の一軒家」

と称していたのに、この一年半のあいだに、大声を出せば届きそうな距離に三軒の新しい別荘ができ、家など建つはずがないと思っていた前の沢（我が家の前は小径をはさんで沢になっていて、急な斜面が北へ向かって落ち込んでいる）にもブルドーザーが入って造成工事がはじまった。

それでも我が家の周辺などはまだいいほうで、歩いて五分くらいの距離にある一区画などは、この冬だけでいっぺんに七軒も新しい別荘ができた。ほとんど軒続きに、である。まるで東京郊外の建売り住宅群がまとまって引越してきたみたいだ。しかもその隣接する区域には現在四軒の新築工事が進行中で、いつも犬の散歩のときにそこを通る私たちは、

「別荘団地」

と呼ぶことにしたくらいである。本当に、いったいどうなってるんだろう。

聞くとところによると、軽井沢の土地の値段はこの二年間で四倍に上がったという。東京の地価の高騰や財テクブームのあおりで、県外の不動産屋が地上げまがいの活動をしているという噂だ。そういうところが、買った土地にプレハブ別荘を建てて売り出そうとしているに違いない。なにしろ工事が多いので職人の数が足りず、毎日群馬県あたりから碓氷峠をのぼって大工さんや左官屋さんが軽井沢にやってきている。その数は、スキーヤーよりも多いくらいだ。

犬を散歩に連れて出ると、道端のあちこちにフンが落ちている。

もちろん多くは他の犬のフンだが、なかにはヒトのフンもある。どこが違うかというところ、犬は紙を使わないものね。いくら暖冬だといっても軽井沢の冬は寒いから、仕事中の職人さんがもおしてしまうものかもしれない。

えーと。ちよつと予期しないうちにキタナイ話になってしまったけれども、そういうえば昨年

の秋に、軽井沢駅の公衆トイレが新装された。出口左の広場の一角になにか白亜の殿堂のような立派な建物ができたので、観光案内所かと思っていたら、それがニュー・トイレだった。総工費九百万円だそうだ。とても美しい。

それから、駅前広場の一角に、二階建てのログ・キャビンが新築された。まさかこんなところに別荘でもあるまいし、こんどこそ観光案内所かと思ったら、なんとそれは新しい派出所であつた（観光案内所は、古い駅舎の一角に、夏のあいだだけ淋しく開いている）。

百年の歴史を持つリゾート地軽井沢も、年々刻々変わっている。

このあいだやってきた郵便配達の方は、

「昔は電線がビュビュウ鳴るくらい寒かつたけれど、最近はダメだなあ」

と嘆いていた。寒いとして電線がビュビュウ鳴るのか、科学的なこととはわからないが、風がなくても寒気で電線が震えるのだそうだ。零下十五度とか二十度とか。そういう寒さが減多になくてつまらない、軽井沢らしくなくなった、というのである。

今年の暖冬は世界的な異常気象によるものらしいが、そうでなくても年々この土地の気温は上がっている。冬は暖かくなり、夏は暑くなっている。スキー客が増えてシーズンが通年化し、どんどん木が切られて別荘が建ち、道は踏み固められ舗装され……その結果、軽井沢の森と空気にしだいに熱気が貯えられてきたわけだ。たしかに夏など、別荘地でも舗装道路の近くにいとひどく暑い。

「こりやあ、少し、規制しなきゃダメだよ。別荘が建ち過ぎてカル、イ、サ、ワはダメんなっちゃうだよ」

と、この町に生まれて五十年住んでいるという郵便配達のおじさんは、十分ばかりの立ち話のあいだに三回も「ダメ」を繰り返して帰っていったが、たしかに、昨今の建築ブームは、ごくようなニワカ住民さえ不安にするほどの激しさなのである。

なお、地元の人にはカル、イ、ザ、ワと濁らず、うしろの四音を高め、カル、イ、サ、ワと発音する。Sを濁るようになったのは、百年前にやってきた外国人の発音に影響されたのだという。

ホントの季節は何月号？

高原の風がまだ冷たい季節から、落葉松からまつの小枝の先には仁丹玉のようなうすみどり色の球が集まって春を待っている。そしてこの小さな天使たちがいつせいに芽吹くとき、私たちは無垢であることの鮮やかな美しさに感動するのだ。

——という一文を、ある化粧品のPR誌に書いた。ちよつとメルヘンチックで照れくさいところもあるが、美しい春のスタートがテーマということで、軽井沢の春のイメージを書いてみたのだ。ところが、いつものようにファックスで原稿を送ると、編集部から折り返しにクレー

ムがついた。春の号だが、多少編集作業が遅れている。だからこの文章の前半の部分は季節感がズレてしまうおそれがあり、手直ししてくれないかというのである。

春の号は、ふつうは三月に出るらしい。だから遅れたとしても、四月中には読者の手もとに届くはずだ。

軽井沢では、四月はまだ風が冷たい。緑の姿はどこにもない。落葉松の枝先に小さな丸い芽がつくのは四月末を過ぎてからで、それが五月の連休の終ったあたりから芽吹きはじめるのである。だから私は十分に季節を先取りして原稿を書いたつもりだったが、東京で暮らしている雑誌社の人は、「冷たい風」は二月のうち、芽吹きの話は三月まで、と、業界の常識カレンダーをあてはめて考えている。

実際、軽井沢に住んでいると、困るのである。春がなかなか来ない、秋が早い、すぐ冬になる。雑誌社が取材にやってきて撮影をしようということになると、感覚がすっかりズレてしまう。それでも秋に来て冬めいた景色を撮るにはかえって都合がいいのだが、五月中旬まで緑がないのにはみんな困り果てる。

日本の雑誌は、奇妙な習慣を持っている。

三月に出るのが四月号、四月に出るのが五月号。なかには三月末に五月号、四月末に六月号というものもある。週刊誌の表紙にも、実際の発行日から十日くらい先の、まったく意味のない日付けが記してある。